

○ 佐久間 汐子 (新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学講座
福祉学分野) 八木 稔 (同 口腔保健学分野)

【背景】藤好他 (2005) の報告では、学童のブラッシング行動に対する自己管理スキル (SMS) の関与が示唆されている。

【目的】歯肉炎ハイリスク児のスクリーニング指標として、歯肉炎関連指標の他SMS情報を加え、3つの指導形態におけるSMSと行動変容との関連性を評価することを目的とする。

【対象および方法】Y小学校の平成19、20年度の5年生計158名を対象とした。歯肉炎診査および質問紙調査が5年生11月、6年生4月、11月の計3回行われた。その間、5年生2月には視聴覚教材による保健教育とフロスの使用の実技指導が学年全体に行われ、続いて、学級別に3つの指導形態—「対照:CONT」・「ハイリスク児対象指導:HR」・「全員指導:ALL」—でフロスの使い方の追加指導が行われた。質問紙調査 (自己記入式) は、SMSと歯科保健知識・行動に関する2種類であった。SMSに関するアンケート項目は、高橋他 (2000) 開発の項目の一部を5年生が理解できる表現に変えて使用した。指導形態の学級別割り当ては、19年度・20年度別にSMS点数の学級平均を算出し、それぞれの年度で平均点の高い順に「CONT」・「HR」・「ALL」

学級とした。解析では指導形態によって2年度をまとめた。また、個人のSMS点数を年度毎に降順に25、50、75パーセンタイル値でカットし、SMSスコア1・2・3・4を与え、スコア4をハイリスク児スクリーニング基準とした。

【結果】5年11月の質問紙調査では、保健行動・知識に関する回答にSMSスコア間に有意な差が認められた。また、指導後2カ月の週1回以上のフロスの使用状況は、SMSが高い児童ほど良好であり、指導形態ではCONT群 (平均SMS点数が高い) で良好な使用状況であった (表2)。

【結論】SMSは、指導後の行動変容にも関連しており、教育プログラムは個人および集団のSMSを考慮して構築される必要がある。

連絡先: 佐久間 汐子 〒950-8514 新潟市中央区学校町通2-5274 新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学講座
shihopre@dent.niigata-u.ac.jp

表1. 指導形態別SMS点数およびSMSスコア別人数分布

指導形態	児童数	SMS点数		SMSスコア別児童数			
		Mean	SD	1	2	3	4
CONT	51	29.02	4.40	18	18	9	6
ALL	53	26.21	5.12	10	11	18	14
HR	54	27.11	4.61	9	17	16	12
計	158	27.42	4.83	37	46	43	32

表2. ロジスティック回帰分析 目的変数:2ヵ月後の週1回以上のフロス使用の有無

説明変数 (有意)	回帰係数	SD	p	95%信頼限界	オッズ比	SD
指導形態 1:CONT 0:ALL・HR	1.192	0.549	0.030	0.115 2.269	3.29	1.81
SMSスコア 1, 2, 3, 4	-0.576	0.218	0.008	-1.003 -0.15	0.56	0.12
Q2. あなたの歯ぐきははれていますか? 1:いつも、だいたい、ときどき腫れている ・わからない 0:腫れていない	1.067	0.491	0.030	0.105 2.029	2.91	1.43
Q17. 歯を磨いたあとスッキリしますか? 1:いつもスッキリする・だいたいスッキリする 0:ときどきスッキリする・スッキリしない	1.819	0.712	0.011	0.423 3.215	6.16	4.39
定数	-3.534	2.041	0.083	-7.534 0.467		

$R^2=0.2442$

$p=0.0006$

説明変数:22変数 (歯肉炎情報、指導形態、SMSスコア、歯科保健アンケートの回答)